アルテス リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）
第68号　2001年6月　43頁～56頁

吉田松陰の思想（III）

岡　崎　正　道

はじめに

吉田松陰の思想（Ⅰ），（Ⅱ）において，松陰の尊王論－天皇観と対幕府観，そして極めて濃厚かつラディカルな人民主義的性向を考察してきた。そこで本稿ではこれらの所論とも関連させながら，松陰の対外観念－開国と攘夷の思想について検討を加えていきたいと思う。

幕末期の時勢を主導した政治イデオロギーは，尊王攘夷思想であった。尊王論も攘夷論も朱子学の大義名分論に由来し，元来は別個の思想であったが，幕末に至り外圧の高まりの中で幕府の手による開国に抵抗する理論的根拠となり，次第に反幕的性格を帯びるようになっていった。

松陰はまさに尊王攘夷論の急先鋒であり，多くの門弟らに影響を与えた先覚者でもあった。その点は，本稿に先立つ「吉田松陰の思想」（Ⅰ）及び（Ⅱ）でも論じたところであるが，結論的に言えば松陰における「尊王」とは，人民の平等な政治参画の下に，彼らの利福を保証する国家・社会の建設のための草莽革命遂行の過程で，革命主体たる草莽（→国民）側のいわばシンボルとして掲げられた一種の旗標であり，それ自体が目的価値ではなかった。

一方松陰における「攘夷」とは，かかる革命の果てに想望される近代統一国家建設へ向けた，ナショナリズムの叫びに他ならなかった。すなわち攘夷と言っても，鎖国制度を堅守し封建体制を維持するための“排外的攘夷”ではなく，むしろ西洋近代国家と交流し，その文明を積極的に学び得て，日本をして近代国家たらしめんがために，まず不羈の民族的気概を示し，あくまで列国と対等関係に立たんとする，いわば“開国のための攘夷”であった。

1

日本の運命を変えたペリーの黒船来航は1853年6月3日，奇しくも松陰が二度目の遊学で江戸入りしたその日に起こった。市中を驚天動地の混乱に巻き込み，幕府をはじめとする支配層を震駭させたこの大事件は，勿論松陰にも衝撃を与えずにはおかなかったが，それでも世界の情勢を探知しようと努め，事あることを予見してその対応策に思慮を致してきた彼は，比較的冷静に事態を受けとめることができた。

> 此の度の事中々容易に相済み申すまじく，孰れ交兵に及ぶべきか。併し船も砲も敵せず，勝算甚だ少なく候…何分太平を頼み，余り腹つづみをうちをると事ここに至り，大狼狽の体憐むべし。且つ外夷へ対し面目を失ふの事之れに過ぎず。併し此れにて日本武士，一へ

こしめる機会来り申し候。賀すべきも亦大なり。[1)]

太平の世情に対する頂門の一針として，むしろこれを歓迎せんばかりの言い振りだが，他方攘夷家の慷慨も忘れていない。

かのワシントン国なるもの，新造の陋邦，乃ち堂々たる天朝を以て屈して之れに下る…此の時こそ一当にて日本刀の切れ味を見せ度きものなり。(宮部鼎蔵宛書簡，⑦165)

かく勇み立ちつつ松陰は，決然として立つべき時の到来を実感する。(「僕痩駑と雖も，為すあるの時至る」(⑦163)) しかし彼は憤然として異人襲撃に走るごとき愚行には赴かず，冷静に諸事情を勘案し，綿密な対策を練った。そして「将及私言」「急務条議」「海戦策」「急務策」「急務則」といった意見書を，相次いで藩邸に提出する。

「将及私言」では外圧への対抗策として，(1) 大義を正し，(2) 政治の風を刷新し，(3) 砲術・船艦等防備の策を講ぜよと言う。(1)の「大義」の項では，「天下は天朝の天下にして天下の天下なり。幕府の私有に非ず」と幕府の政権私物化を批判し，「総じて大義を挙げ行ふ時は必ず衆議帰一の所を用ふべし。之れ政の先著なり」(②13) と徳川の独裁に釘を刺した。「幕府は固より当に天下の諸侯を率ゐて天下の恥辱を清ぐべく，以て天朝の宸襟を慰め奉るべし」(②12) というように，一応尊王敬幕を建前として主張してはいるが，同時に「是の時に方り，普天率土の人，如何で力を尽さざるべけんや。何ぞ本国他国を択ぶに暇あらんや」(同) とも述べて，一君万民論に通ずる傾向もほの見せている。

ところで松陰がいたずらに狼狽せず冷静さを堅持したことは，外患を契機として内憂に思いを致した姿勢にも表われている。多くの攘夷論者がひたすらに夷狄撃攘を叫号する中で，事の本質が那辺にあるかを考察し，十全の対応策を練るだけの余裕と蓄積が彼にはあった。

肉食者は鄙し，総じて邸中の人一人として憂憤の人なし。嘆ずべし，嘆ずべし。明年二，三月に至り候はば初めて気が付き申すべく候へども，夫れでは間に合ひ申さず候。(兄宛書簡，1853年8月，⑦181)

松陰がかなり早くから抱懐していた封建官僚制に対する不信感は，難局打開のための何らの術をも知らぬ武士層の態様を眼前にして，明確な信念にまで高まったと言える。そしてこのことが他方では，民生への関心を強め，人民主義的傾向に拍車をかけていくのだが，こうした姿勢転換は，一応当面の危機が回避され，「西洋夷と兵を交ふる如きは，十年外に非ざれば決して此の事なし」(②142) と認められるに至って確実なものとなるのである。

黒船来航の当初は軍備増強を唱えていた松陰が，密航に失敗して捕縛された後「今の務むべきものは民生を正しうし，民をして生を養ひ死に喪して憾みなく…是れを務めずして砲と云ひ艦と云ふ…策是れより失なるはなし」(②140～141) と主張するようになるのは，上記の如き思考を経てのことだったと言える。そしてこのことは，彼の西洋観の転回とも無縁ではない。

松陰には，西洋文明を「夷術」として峻拒する偏狭さはもともと薄かったが，現実の外患を前に国土の防衛を念ずる場合には，それが西洋のものであろうとも優良な成果なら積極的に導

1) 道家龍助宛書簡，大和書房『吉田松陰全集』第七巻161～162頁。以後当全集からの引用の場合は，本文中に (⑦161～162) のように略記することとする。

入するという柔軟な思考が必要なのであり，この面でも彼は頭脳の切り換えが早かった。「大砲小銃共に西洋の器械節制に倣ひ，日々操演をなすべし」（将及私言，②16）と，ペリー来航直後に早速献策した松陰は，さらに進んで洋学研修のための学校設立まで提唱するに至る。

> 大城の下，宜しく兵学校を興し，諸道の士を教へ，学校中に操演場を置きて砲銃兵騎の法を習はし，方言（外国語－岡崎注）科を立てて，オランダ及びロシア・メリケン・イギリス諸国の書を講ずべし。砲銃歩騎は本邦の古法固より用ふべきものあるも，更にオランダ諸国の法を求めて，其の未だ備はらざる所のものを補ふべし。（幽囚録，②49）

他の攘夷論者の多くが「和流」を墨守し，異人を一刀両断にしようと暗中飛躍するような者も少なくなかった中で，松陰は冷徹なくもりなき目で彼我の現状を認識し，かつ遠望に努めていたのである。

> 器械技芸は年を逐ひて変革し，思慮に始まりて試験に成ること素より華夷なし，何ぞ都鄙あらん。（同前，②50）

彼我を合理的に弁別する明晰な思考態度こそ，彼の本分であった。

このような西洋理解は，彼の民生論にも濃厚に反映し，日本を西洋に劣らぬ福祉国家へ生まれ変わらせたいという願望を生む。

> 余が策する所は武備の冗費を省き，膏沢を民に下さんとなり。四窮無告の者は王政の先にする所，西洋夷さへ貧院・病院・幼院・聾唖院等を設け，匹夫匹婦も其の所を得ざる者なき如くす。況んや我が神国の御宝にして犬馬土芥の如くにして可ならんや。（獄舎問答，②145）

そしてこの願望は，「専ら下を利するを務めて上を利するを務めず…民富み且つ庶にして国従って旺盛す」，「鉅商豪農も亦国の富」という，発展途上の資本主義的要求に答える姿勢によって支えられていた。これこそが，「上を損じて下を益する」ところの「聖人の政」の実現に通ずる道と認識されたのである。

2

兵学的見地から松陰が西洋技術の優秀性を評価した点については既述したが，ここでは彼の西洋文明に対する認識の変化を通観してみたいと思う。それが彼の対外観の構造的理解のために，大いに益あることだからである。

ペリー来航以前の松陰は，西洋の学術技芸に対し一定の理解は示していたものの，それでも概して保守的な傾向が強かったことは否めない。

> 銃砲を初め戦法武備に至る迄，近世西洋の術を我が国に伝へ候て，専ら一流を立て候もの御座候。其の輩我が国兵家の説を孤陋などと罵り候様相見え，又我が国の術を学び候者，彼の輩の本に背き候を悪むより，遂に互に己れを是とし人を非とし，其の間讐敵の如く一

大溝界を成し…更に他人の長を求むべき儀は之れあるまじくと奉存候。(水陸戦略，1849年，②151)

西洋夷狄の技術導入に反対し，我が方の優越をやみくもに強調する態度が，若年期の松陰には見られるが，しかし西洋に対する日本の優越をいかに叫んでみても，別に合理的実証を経ての確信ではないのだから，かかる信念も甚だ不安定ではあった。

西洋の術吾れに合はざる事多しと雖も，懐を虚しくして是れを聞く時は間々取るべき事も之れあるべく…互に討論研究仕り度き儀と奉存候。(同前)

要するに松陰は，いたずらに西洋崇拝に陥って自尊心を失うことは断じて許しがたいという信念に基づき，一応我が国の優秀性を主張するものの，その合理的根拠如何となると十分な説明がつかず，結局のところ，卑屈にならざる限りで西洋学もそれなりに考慮の余地を認める，という対応をこの時期はとっていたのである。

狂信的な尊王論者という先入観から，松陰を神秘的な非合理主義者と見るなら，それは大きな誤りである。彼は本質的に透徹せる合理主義者であった。

凡そ物用あれば斯ち形あり，形あれば斯ち法あり，法あれば斯ち理あり。所謂理なるものは，古今彼我に渉りて変ぜざるものなり。故に能く理に通ずる者は理より法を生じ，法より形を生じ，形より用を生ず。何ぞ必ずしも舟に刻み，株を守ることを之れ為さんや。然りと雖も，空理に走りて実用を捨つるは学者の通患なり。(未焚稿・操習総論，1849年，①244)

夫れ制度器械は古あり今あり，我あり彼れあり。故に吾が甲越に取る所は，形に非ずして用なり。用に非ず法なり。法に非ず理なり…理は斯ち易はらず…何ぞ必ずしも舟に刻み株を守ることを之れ為さんや。(未焚稿・五層の論陣，1849年，①261)

このように松陰は普遍的原理としての「理」を認める一方，「法」「形」なる概念で古今東西彼我の差異を論じ，而して実用面における柔軟な応用性を尊重して，学者の空理空論の弊を非難する。

こうした基本的認識を有する松陰が眼前に黒船の巨軀を見たとき，何ら為す術なき日本の指導者層の愚怯さに対する憤懣とも相俟って，西洋文明の雄偉さが身に泌みたのは当然であったと言うべきだろう。

現今洋儕狒猖切要の務にして目前に迫り候故…天下有志の人には迚も海外の情態を知らざれば戦は出来ず，又大砲小銃とも西洋の節制器械を取らざるべからずと通論に御座候…西洋流を毀るも知ってから毀るがよし，責めて三兵タクチキか兵学小識にても研窮致して上の事なり。(兄宛書簡，1853年8月，⑦183～186)

西洋の学術を導入するか，それとも拒絶するか，そこに「筆紙の能く悉し得ない」(将及私言)ほどの「得失」を感じた，松陰の西洋評価。それは実学重視の姿勢から導き出された，否応なき結論であった。

西洋砲銃のことは一言にて断ずべく，故は彼は各国実験を経たる実事，吾れは太平以来一二の名家座上の空論…黒白判然に御座候…生兵法は大怪我の本に付き，西洋の原書にて調べ，度量寸尺毛髪も違はぬ様に致し度きものに御座候…何も国の為めなれば，和流家も西洋法も兼ね学ばせ度きことなり。（玉木文之進宛書簡，1853 年 9 月，⑦ 191～193）

和流の兵学者を空理空論，旧套墨守のアナクロニズムと断じたところに，“攘夷論者”吉田松陰の真面目は存する。この点同様に攘夷を唱えながらも，「蛮夷の長技を取って国勢を張ると云ふ説の，聊も裨益なくして却て大害あることを悟るべし」[2] などと，「夷術」を専らネガティブにしか評価し得なかった，大橋訥庵らとの思想的相違は明白である。

しかしながら松陰は，黒船の脅威に驚き西洋文明の雄偉に心酔するだけの，西洋賛美者だったわけではない。彼がいかほど西洋を評価しても，基本的には物質文化の面が中心であり，精神文化の方にまでは及んでいないことがわかる。それは何故であるのか。

西洋の教たるや，儒と仏と皆与に倶に天を戴くべからずと言ふは詢に然り。而て徒らに之れを大難に附し，之れを児戯に付するは，善く弁ずる者に非ず。夫れ天文地理・医術暦法は形なり，理に非ざるなり…一理明かにして洋教の讐も以て報ゆべきなり。（野山獄文稿，1855 年，② 341）

他の封建人士と同様，松陰にもやはりキリスト教に対する偏見が見られるかのようである。西洋学の導入に乗じて西洋邪教の流入してくることが，過度に警戒されている。

儒仏は正に神道を輔くる所以なり。神道豈に儒仏を以て比すべけんや。神道は君なり，儒仏は相なり，将なり…然れども神道と雖も亦或は流れて巫祝の流となる。是れ洋教の乗じて起る所なり。深く懼れざるべけんや。（同前）

だがこうした文からもわかるように，松陰がキリスト教の浸透を恐れたのは，単純に「神国日本の汚れ」といった偏狭な理由によるのではなく，何より洋教が民心を蠱惑するのではないかということを懸念したためであった。そうした事態に至れば，国内の動揺は増し，結果「外患を内政に転じる」という彼の思惑も崩れると考えたのである。

夫れ外夷の互市日に盛に，万国の帆檣吾が港口に林立し…此の時に於て，豺狼の野心を逞しうし，我が国を上犯するの事あらば，邦内の民半ばは夷輩の役とならん。此の事満清の覆轍昭々たり。（獄舎問答，1855 年，② 139）

従って西洋の学術を移植するに当っては，その優秀性に瞠目しすぎて和魂まで失うことにならないよう，あくまで強調するのである。

欧墨の学を修め，夷狄を尊崇歆慕する者は…最も弁拒すべし。然れども夷の砲碩・船艦・医薬の法・天地の学，皆吾れに於て用あり，宜しく採択すべし。其の皇国の用を成すに至りては，亦夷狄にして中国に進むと云ふべし…若し其の人果して夷狄の心を挾み，其の術中

2）「政権恢復秘策」，岩波書店『日本思想大系 56』201 頁。

国に益なくして損あらば，速かに是れを誅斬せんのみ，速かに是れを禁遏せんのみ。(講孟余話，1855年，③119～120)

「夷狄にして中国に進む」といった文言は，華夷思想の残影とも思えるが，要は和魂の保持を前提に西洋の技術文明を確実に受容すべしという趣旨である。和魂と言っても，それは神道とか国学とか具体的な宗教や思想に立脚するものでは必ずしもなく，もっと抽象的な“独立の気概，精神”ぐらいを意味すると解しておいた方がよかろう。国禁を犯してまで洋行を企てるほどに西洋を景仰した松陰は，反面では実に堅牢な不覇自立の精神の保持者であったから，西洋学を好評しつつも，常に自尊の一言を忘れることはできなかったのである。

松陰のこの面の思想傾向は，師佐久間象山の「東洋道徳，西洋芸術」(「省譫録」)のニュアンスに類似していると言えるかもしれない。ただ松陰の場合，「窮理」といった語を随所に用いてはいるが，朱子学に言う格物窮理をそれ自体として追究した経験を有しているわけではない。「学問の節目を糺し候事が誠に肝要にて，朱子学ぢゃの陽明学ぢゃのと一偏の事にては何の役にも立ち申さず」(入江杉蔵宛書簡⑧424)という信念を抱いていた彼にとって，原理的思考はさほどに顧慮に値しないものであった。

従って，若年より朱子学を考究し思索を重ねた末にかかる結語に到達した象山とは，表面的には類似しているにせよ，根の深さが相当に違うのである。松陰においては，「誹るも恥づるも皆瑣事小節」であり，「羨むも悪むも皆一偏の見」である。そういうことは末事なのであり，「畢竟同様窮理の学」，「其の道に於て軽重なきは同じ」なのである。即ち朱子学的名分論とか国体論とか，一時的に強調される理念も，実学的見地の前には相対化され得るのであり，彼は洋学の利点を吸収しつつ経世論の確立に憚ることなく専心できるのである。

世間の毀誉は大抵其の実を得ざるものなり。然るに毀を懼れ誉を求むるの心あらば，心を用ふる所皆外面にありて，実事日に薄し。故に君子の務めは，己れを修め実を尽すにあり。何ぞ世間の毀誉に拘らんや。(講孟余話，1855年，③163)

これが松陰の実学精神の基本であった。

こうした姿勢は師佐久間象山から学んだところでもあるだろうが，さらには松陰の合理的思考に対するある種の恬淡さも与かって力があったと言えよう。そしてこのことは，「封建的支配関係ならびにそれを支える上下尊卑の等級のモラル」[3]を肯定した象山を超克して，松陰が革命思想を打ち出し得た所以でもあった。松陰の革命思想は尊王論の狂信化の結晶であるとしばしば言われるが，それは事の一面にすぎない。彼が恋闕の狂情に酩酊していた時も，あるいは後に憂憤と焦燥に駆られて激越な討幕論を叫んだ（ように思われた）時も，実はその裏面にしたたかな合理精神が貫流していたのである。松陰の西洋文明評価は，和魂洋才，「東洋道徳，西洋芸術」的な色合を示しながらも，それを土台とする独自の経世論を生み出し，さらにこれを幕藩体制批判の根拠にまで昇華せしめるという，二重の意味の思想的発展の契機となるものであった。

3) 源了圓，中央公論社，『徳川合理思想の系譜』332頁。

3

これまで見たように，外患を内政へ転じ，西洋文明に対してもこれを正当に評価する，柔軟かつ冷徹な対外観を有していた松陰は，日本の外交政策としての鎖国には一貫して反対の態度をとった。

攘夷派志士の多くが，鎖国は徳川政権によって初めて行なわれた外交策であるということさえ正しく認識せず，日本は有史以来国を閉ざしているかの如き錯覚を抱いていた当時の世相の中で，「通信通市は古より之れあり，固より国の秕政に非ず」（幽囚録，②56）という確然たる意識を保持していた松陰は，極めて自然な議論として偏狭な鎖国攘夷の非を説くことができた。

> 鎖国の説は一時は無事に候へども，宴安姑息の徒の喜ぶ所にして，始終遠大の御大計に御座なく候。一国に居付き候と天下に跋渉仕るとは人の智愚労逸，近く日本国内にても懸絶致し候事，況や四海に於てをや。（戊午幽室文稿・続愚論，④348）

むしろ積極的に国を開き，列国と通交し，富国強兵に努めるべきであると言う。

> 如かず，大いに通商を開き，船隻を増し，物質を殖やし，港口より輸出し，士人をして之れを統領せしめんには。則ち富国強兵の資なり。必ず之れを施行せられんことを欲す。（戊午幽室文稿，④363）

開国通商が国策として賢明であることをはっきりと認めているのみならず，「天朝より勅諚を以て厳重仰せ出され…実事を以て御示し成されず候ては十分に参り兼ね候」（続愚論④348～349）と，鎖国に固執する朝廷に方針変更を強く迫ってさえいるのである。このように松陰は明らかに開国論者であり，ごく常識的な意味での攘夷論者とは即断できない。

常識的な意味での攘夷論と言えば，その典型は後期水戸学である。代表的水戸学者豊田天功は，黒船来航直後の上呈書である「防海新策」の中で次のように述べている。

> 夫夷狄を防禦するは…其の船を焼き捨て，其の人をば死罪に行はせられ，或は牢獄に押入れ，其国に放ち帰すを縦し給はず…是国勢至て盛なるが故，夷狄震恐せし所にて，当今に於てもかくの如きの国威おはしましなん事，是夷狄防禦の大策に於て第一先務と申すべき者也。[4]

とにかく夷狄に対しては専ら恐怖を与えて，日本に接近させないようにするのが上策だと言うのである。さらに言う。

> 交易を議する者は皆斗筲の小人（狭量の小人物の意－岡崎注）にして…臆病至極の徒の言ふところにして，其の言国を誤るの甚しきといふべく，在上の君子右等の邪説に誑され給はんには，いつとても海防の大策を定め，夷狄を攘ひ退くる事相成るべからず。（同前）

ここには対外通商への理解など一かけらも存せず，開国通商を国策の要諦と捉える松陰との懸

4）岩波書店，『日本思想大系53』340頁。

隔は明瞭である。而て豊田の対外論は，次のような結論を導くことになるのである。

> 海防の策は文恭公（徳川斉昭－岡崎注）御時代仰せ出されし打払の令に過る事あるべからず…其故は神君御時代より外国は清国・和蘭・朝鮮・琉球に限り，其他は一切御近付遊ばされずとの御定，実に永久の御良法にて，其万世の後を深思遠慮あそばされし神智明算の程，凡そ御子孫たる御身にては，千万年と雖も右の御良法御守り遊ばさるべきは申すに及ばず，神州に於て御的当御良策此上無き御儀と称し奉るべき也。（同前）

鎖国攘夷を永久に維持すべき良策とする発想からは，西洋文明の果実を部分的にでも導入しようとする政策は生まれようがない。そして水戸学の啓発を受けた，松陰と同時代の攘夷主義者には，豊田と大同小異の考えの持ち主が少なくなかった。例えば，後に水戸藩士らと結んで坂下門外の変（老中安藤信正襲撃事件）を演じた，儒学者大橋訥庵はその著「政権恢復秘策」の中でこう述べた。

> 元来我神州は土地甚だ沃饒にして，物産極めて多しと云へども，地の出す所には限り有て，諸蛮の求むる所に限りなければ，後には精髄を吸尽されて，居ながら枯木の如くになり行き，精神奄々と消え果て滅亡するにも至りなん。そは貿易の興れること未だ三年の月日に満たざれども，物価の騰貴，列藩の疲弊，細民の困窮等は殆ど凶歉の如くになれるを以て悟るべし。[5]

開港以来の物価高騰と，それを主因とする人民の困苦という現実の認識は的確であるが，これに対する方策としてはやはり攘夷しか出てこない。

> 攘夷の快挙をなさんとするには，別に奇策と云ふ物なく，只速かに天朝よりして夷狄攘斥の勅命を公然と海内に下し玉ふて，感奮激発せしむるに如くことはなく，此策をだに決し玉はば，神州の命脈は恢復せずと云ふことなし。[6]

朝廷を動かして攘夷の大命を下させようという主張は，文久年間の攘夷論としては別に特異なものではないが，開国の勅諚を出させようと考えた松陰の意識とは全く反対である。

大橋のような対外論を前提にするならば，尊王攘夷の「大義」に基づいて討幕を唱えかつ実行したとしても，それは現実的な力を持ち得ず，幕府の武力によって敗北を余儀なくされるであろうし，また同時に“夷狄撃攘”も併せ行なわねばならず，こちらの方面でも圧倒的に優勢な西洋列強の軍事力の前には文字通り鎧袖一触となろう。

かくして水戸学思想を実行に移した攘夷派勢力は，開国通商によるメリットに着眼し得なかったがゆえに，文久・元治期の政治闘争の過程で敗退してゆくことになる。

まず水戸学の本派とも言うべき水戸天狗党は，尊攘を掲げての決起に及んだにもかかわらず「敬幕」の一線を克服できず，藩内の頑強な佐幕派勢力（諸生党）と幕府との挟撃に会って滅亡し，討幕戦争に立ち上がった天誅組（吉村寅太郎ら）や但馬義兵軍（平野国臣ら）も孤立無援の戦いを強いられ，無惨な自滅に追い込まれた。そして松陰の門弟たちが牛耳を執った長州藩

---

5) 岩波書店，『日本思想大系 56』188 頁。
6) 同前，190 頁。

までもが，禁門の変から馬関戦争，第一次幕長戦争と続く擾乱の過程で，一時は亡滅の危機に晒されるのである。

松陰の見識の高さは，こうした後の歴史の展開からも明らかとなろう。松陰はその最終段階で奉勅攘夷を掲げての討幕を主張するが，それが激烈であるゆえに，彼を後の尊攘義挙（天誅組や但馬生野の義兵）の先駆と捉える向きが少なくない。けれども松陰は攘夷討幕を説く以前に，西洋諸国の文明を理解しその力を正当に評価する「開国論者」だったのである。この点は最後まで本質的に変らなかったのであり，彼がいかほど矯激な攘夷的口吻を弄している時でも，反面においては意外に冷めていたことを忘れてはならない。奉勅攘夷は，討幕のための手段として主張されたにすぎぬとさえ言えるかもしれない。攘夷の限界を悟って開国論に踏み出し，討幕のための戦略として「攘夷」を唱え続ける，元治以降の討幕派の“現実主義路線”こそ，松陰の思想の帰結であったと見なし得るかもしれないのである。

4

これまで検討してきたように，松陰は鎖国のアナクロニズムを批判し，開国して積極的に諸国と交易せよと主張した。しかし一般に吉田松陰は開国論者ではなく，攘夷主義者であると見なされている。確かにその通りである。即ち松陰の「開国論」は原則論であり，現実の徳川幕府の手による開国政策に対しては，彼は反対の態度を取り続けた。何故ならば幕府が進めている外交は日本の主体性を喪失した売国的外交であり，それは因循な鎖国攘夷論よりも尚有害だからである。

> 癸丑・甲寅墨魯の変，皇国の大体を屈して陋夷の小醜に従ふに至るものは何ぞや。朝野の論，戦の必勝なく，転じて変故を滋出せんことを恐るるに過ぎず。是れ亦義理を捨てて功效を論ずるの弊与に逆境を語るべからざる者に非ずや。世道名教に志ある者，再思せよ，三思せよ。（講孟余話，1855年，③28）

姑息な事勿れ主義に基づく開国が，長い目で見た場合日本に大きなマイナスをもたらすであろうことを，彼ははっきりと見通していた。「吾れ盛教を勉めずして人の衰弱を願ふ」（同前，③63）といった，他力本願的な甘い考えで外国と対峙できるかと松陰は言う。彼は西洋文明に対する大いなる理解を有していたが，さればとて列国の日本への対応を好意的に受けとめていたわけでは決してない。むしろ彼らの邪悪な意図を鋭く看破していたのである。

> 今般アメリカの軍艦七隻江戸近海に繋迫す。其の情固より狡黠にして，其の状亦頗ぶる猖獗なり。理宜しく天下の大義を伸べて，逆夷の罪を征討すべし。（海戦策，②28）
> 神州の以て深患大害と為す所のものは，ワシントンなり，ロシアなり。而してロシアの国都は海外万里極西北の地に在り…近ごろ火輪船に乗じ来りて界を議し，締交を求む。安んぞ之れを遠しと謂ふを得んや。其の無事今日に至りしは，其の地近しと雖も荒寒不毛，兵寡く艦少なきを以てのみ。（幽囚録，②52）

アメリカやロシア，あるいはイギリスを名指しで敵視し，これと対抗することを訴えている。松陰はある時はアメリカ，またある時はロシアというように主敵を変化させているが，さし当

りそれはさほど重要ではない。ともかくも彼は，売国外交を許さず，断固として攘夷の気概を示せと呼号する。

> 近時海賊の猖狂なること，日一日より甚し。今春に至るに及び，遂に城下の盟を為す。而て其の禍患は未だ底まる所を知らず。是に於て忠孝節義の士皆概念として涙下り，恥を雪ぎ仇を報ぜんと思はざるはなし。矩方鈍劣と雖も世々豢養を蒙る，ひそかに報效を思ひ，遂に身を以て大典を犯し，父兄の大憂となる。亦哀しむべきのみ。(幽囚録，②85～86)

ここで「大典を犯し」と言うのは，アメリカ密航の失敗（1854年の下田踏海）を指している。即ち「海賊の猖狂」に屈した幕府の売国外交の，「恥を雪ぎ仇を報ぜん」とする行為が海外渡航の挙だと言うのである。松陰は西洋を理解しこれに学ぶ必要を感じたればこそ，国法を破ってまで密航を企図したのであるはずだが，彼自身の意識では，それこそがまさに攘夷の躬行であるらしい。松陰にとって最も枢要なのは毅然たる独立の保持であり，これに背馳するものは，攘夷であれ開国であれ批判の対象となるのである。

かくして松陰が屈辱外交に切歯扼腕し，「六十六国一塊石となり，万国の夷輩を勦撫せしめ，五大州の陋名を除き，天朝の佳名を賜ふ」（兄宛書簡，1855年4月，⑦364）などと気炎を吐いている間に，アメリカをはじめとする各国との和親条約が結ばれてしまい，アメリカからは公使としてハリスが着任し通商条約の締結交渉に着手する。

こうした事態の推移に松陰は，一旦結んでしまった以上は，たとえ不本意であろうともその条約は遵守すべきである，それが国際信義の道であると説いて，破約攘夷には反対した。

> 今や徳川氏已に二虜と和親したれば，我れより絶つべきに非ず。我れより之れを絶たば，是れ自らその信義を失ふなり。(丙辰幽室文稿，1856年7月，②415)

本質的に外敵たる相手ではあっても，当方より信義を踏みにじるような行ないは厳に慎しむべきだという姿勢は，彼の対幕府観とも共通する性格であると言える。彼が徳川幕府に対して「隔意なき…随従」（⑦365）を誓ったからと言って，直ちにそれを「敬幕主義」と断じてはならないのと同じように，ここで「外夷に信義を失うな」と説いたからと言って，それをそのまま「松陰が西欧諸国の好意を素直に認めた証し」であると解するなら大きな誤りとなろう。思想の全体構造を考慮せず，単に表面的な字義だけで判断するのは少しく危険である。

さて後世から見れば，安政の和親条約こそ実に鎖国制度の終焉だったと言えるのだが，当時においては，「この程度のものなら是非もなし」という空気が支配的だったようで，数年後の通商条約調印の際の喧噪と比較すると，意外なほどの静謐が保たれていた。あるいは「（幕府のアメリカに対する）譲歩は，しかし鎖国制度の拡張解釈的運用によってともかくも処理しうる範囲内のものであった。すなわち下田・箱館の開港場は長崎出島の量的拡大に他ならず，必要物資の補給は難船救助の延長線上にあり，そしてアメリカ領事はオランダ商館長と同様なものにすぎないと強弁することは不可能ではなかった」[7] というあたりで，暗黙のコンセンサスが成立していたのかもしれない。

そうした空気の反映か，松陰も屈辱外交をあれほど激しく論難した割には，和親条約の結果そのものを云々して幕府を弾劾するということは行なっていない。むしろこれを機に彼の関心

7) 佐藤誠三郎，岩波書店，『日本思想大系56』39頁。

は内政問題の方へ移り，以前に拙論[8]で考察したような革新的民政論を展開していくのである。

5

ここまで論じてきたことを総括して，松陰の対外論は偏狭な排外主義的攘夷でもなければ，一方日和見主義的な開国でもない，言うなれば「開国攘夷論」と呼ぶべきものであった。さてハリスに迫られて通商条約の締結を約した幕府が，朝廷に対して勅許を奏請したのに対し，孝明天皇はこれを断然拒否する勅答を渙発した。(1858年3月20日) これに呼応して，松陰が書き上げた一文が「対策一道」である。彼は便々と自論を展開した。

> 謹みて対ふ。弘化の初め，蘭使至りて変をたてまつる。ここに於てか，天下粉々として兵を言ふ。時に和を主とする者少なく，戦を主とする者多し。其の十年後，墨・魯・暗・拂駸々として来り問ふ。而して墨夷の患最も深し。ここに於てか，兵を言ふ者益々盛なり。而して向きの戦を主とする者多くは変じて和を主とす…夫れ戦を主とする者は鎖国の説なり，和を主とする者は航海通市の策なり。国家の大計を以て之れを言はんに，雄略を振ひ四夷を馭せんと欲せば，航海通市に非ざれば何を以て為さんや。若し乃ち封関鎖国，坐して敵を待たば，勢屈し力縮みて亡びずんば何をか待たん…然らば則ち航海通市は固より雄略の資にして，祖宗の遺法なり。鎖国は固より苟偸の計にして，末世の弊政なり。(④328～329)

鎖国攘夷は拙劣な下策であり，航海通市即ち開国こそ日本の取るべき良策であると言う。が翻って，現実の開国論は如何であろうか。

> 今の航海通市を言ふ者は能く雄略を資くるに非ず，苟も戦を免れんのみ。其の志固より，鎖国者の戦を以て憚と為さざるに如かず。故に世の和を言ふ者は心実に戦を畏れ，内に自ら恧づるあり。(同前)

現在の開国論者はいたずらに戦争の勃発を恐れ，事勿かれと願うだけの姑息な日和見主義者たちである。それは真の開国とは言い得ず，むしろ鎖国論よりも有害である。だが現に幕府のとっている開国政策はこの類のものであり，それは売国政策と言わざるを得ない。何故なら「実利を謀り，辞を以て人の国を奪ふ」のがアメリカの奸謀であり，泥縄式の弥縫策をもってこれに応ずれば，易々と彼らに乗ぜられてしまうことは火を見るより明らかだからである。

このような時勢において肝要なのは，ただ航海雄略の積極策である。それによってこそ初めて，「三千年来未だ曽て人の為めに屈を受けず，宇内に称して独立不羈の国と為す」(同前，④330～331) という，日本の主体性が堅持されるのである。では至上の策たる航海雄略とは，一体如何なる内容を持つ策論なのであろうか。

> 宜しく今日より策を決し，上は祖宗の遺法に遵ひ，下は徳川の旧軌を尋ね，遠謀雄略を以て事と為すべし。凡そ皇国の士民たる者，公武に拘らず貴賤を問はず，推薦抜擢して軍帥

8) 吉田松陰の思想（II），アルテスリベラレス第66号。

> 舶司と為し，大艦を打造して船軍を習練し，東北にしては蝦夷・唐太，西南にしては流虬（琉球）・対馬，憧々往来して虚日あることなく，通漕捕鯨以て操舟を習ひ，海勢を暁り，然る後往いて朝鮮・満州及び清国を問ひ…（同前，④332）

「遠謀雄略」といった言句から推考して，これを対外侵略論と臆断するのは正しくない。むしろ対西洋という立場から，東アジアの連帯戮力を促した言説と解すべきである。一方アメリカに対しても「和親の約」を取り結ぶ旨が唱えられており，一応親善友好外交の標榜と見なしてもよいが，但し現実のアメリカの姿勢に対して向けられた，不信と警戒の念は依然緩められていない。

ハリスが通商条約の締結を求めた際のアメリカ側の外交辞令に対し，松陰は駁論を試みたことがあった。

> 合衆国は外国と違ひ，東方に所領を得るを願はざる由，東方とは墨夷よりヨーロッパを東とし，アジアを又其の東とす。即ち大東洋の地方にて，本邦・支那・印度等を指し云ふなり。大東洋の地方，墨夷実に未だ寸地尺壌を有すること能はず。力未だ足らざればなり。力已に足らば，イスパニアの呂宋，オランダのジャワ，イギリスのセイロンの如きものあるを欲せざらんや。唯だ其の力なきを以て反って仁義の言を仮借す，憎むべし。（墨使申立の趣論駁条件，1857年10月，堀田備中守宅にて，④440）

華夷思想に拘泥するあまり西洋諸国の陰険な意図が見抜けず，廂を貸してついには母屋を乗取られる形となった清国の指導者層とは異なり，国際政治のパワーポリティクスとマキャベリズムの邪悪な本質をある程度看破し得ていた松陰には，微笑外交をもって侵略者の本性を隠蔽せんとする欧米の偽善が容認できなかったのである。

> （アメリカ大統領の）本意は実に日本の勇を惧れ，日本の戦はんことを惧る。故に日本の器械技術に乏しきを云ひて其の勇を圧倒し，太平の久しきを云ひて其の戦を沮抑す…且つ世界第一の合衆国と云ふこと，曽て聞かざることなり…若し果して能く第一を以て自ら居らば，軽々しく交を締ぶ時は必ず吾れを臣妾とするなり。熟思なかるべけんや。（同前，④447～450）

開国して通商関係を取り結ぶことが日米双方の利に適うことは十分理解できるゆえ，鎖国の固守には反対する。しかし開国はあくまで，両者の対等関係に立脚するものでなければならない。にもかかわらずアメリカの態度というものは甚だ偽善的であるから，再考せざるを得ない。これが論駁文の趣意であった。この毅然たる姿勢こそ，国家発展のための開国と独立死守のための攘夷を連結させた，独自の開国攘夷論のモチーフであったと言える。余談乍ら，日本は安政の通商条約から戦後の日米安保条約まで，外交において主体性を発揮してきたとは到底言いがたいものがある。国際政治の王道とは何であるか，松陰は時代を越えて我々に語りかけているようにも思う。

ところで「航海遠略」という熟語から連想されるのは，同じ長州藩士の長井雅楽（彼は松陰とは政敵と言うべき関係にあった人物だが）が主唱した「航海遠略策」である。

松陰刑死後，桜田門外の変による幕権失墜の間隙をぬって国事周旋に乗り出した長州藩は，長井のこの献策を藩是として採用し，1861年から62年にかけて長井の策案は主導的な役割を

果たすことになる。

> 近年黠夷猖獗仕り…皇国未曽有の御大難は縷述に及ばず…数百年の太平，武道地に墜ち武備廃弛仕り候より，一旦黠の虚喝に驚き，軽易に条約を結び，終に今日に至り候こと口惜しき次第に候へども，是れを以て太平の余弊今更論弁仕り候とも其益之れ無く，此余は武備を廃れたるに興し，国難を未だ覆らざるに救ひ候儀，当今の急務に候へば，上天朝・幕府を始め奉り，下士・庶人に至り候迄精神を凝し，興救の策を求め…[9]

要するに昨今幕府が無断で条約を結んだのは遺憾なことであるが，今となっては国内で争っても詮なく，かえって外敵に乗ずる隙を与えるのみであるということだ。

> 夫れ戦はんと欲する者は先づ其の利害曲直を明に察し，直利我れに在って而る後戦ひ候事，所謂勝算にて，古今明将の重んずる所に候。曲害我れに在れ共憤懣に堪えず。或は一時の血気に誘はれ，無策の戦を発し敗亡に至り候者，古来歴々数へ尽し難く候[10]

今天下には破約攘夷なる激論が蔓延しているが，彼我の力の関係もわきまえず戦争に勝利できようはずもない。誠に無謀の空論と言うほかはない。

> 然るに当今関東に於て御条約相済候儀，京都には一円御不納得の御事に候得ば…外夷へ対し御口実には相成るまじく，其の故は皇国三百年来御国内の御政道は関東へ御委任と相見え…外夷共関東をば皇国の政府と心得候は尤の事にて，其の政府にて条約調印相済し候へば…天朝御不納得の筋を以て卒然約を破り盟に背き候はば…不信の名を以て皇国に与へん事必然に候。[11]

幕府が責任を持って締結した対外条約に，朝廷が異を唱えて勅許を与えないのは甚だ理不尽である。幕府は三百年来朝廷の委任を受けて政務を担当してきたのであるから，外交権は当然幕府にあると言うべきである。朝廷の対応は，日本に大きな不利益をもたらす結果となるであろう。

> 当今五大州若干の国有ることを聞し召すのみならず，彼より憚らず皇国へ来り，剰へ皇威を蔑ろにし奉るを，鎖国にて御禦ぎ遊ばされんこと神祖の御誓宣に御戻り…誠に恐入り奉り候…願はくは神祖の思召を継せ賜ひ，鎖国の叡慮思召し替られ，皇威海外に振ひ，五大州の貢悉く皇国へ捧げ来らずば赦さずとの御国是一旦立たせ賜はば，禍を転じて福と為し，忽ち黠夷の虚喝を押へ，皇威海外に振ひ候期も亦遠からずと奉存候。[12]

決して皇国の伝統的国策ではない鎖国策を放棄して，海外雄略それも積極的に覇権を唱えようという，相当な硬論である。この覇権主義は松陰の主張とは随分隔たりがあるように思えるが，西洋帝国主義の覇道に対し当方も力によって対抗しようと図るこの所論は，それを槓杆として

---

9) 岩波書店，『日本思想大系 56』215 頁。
10) 同前，217 頁。
11) 同前，217 頁。
12) 同前，219 頁。

挙国一致の体制を実現させようとする限り，文久初年の時勢に適合する側面を確かに有していたとは言える。

しかし「国是遠略天朝に出で幕府奉じて之れを行ひ，君臣の位次正しく，容易に海内一和仕るべく候」[13] という堂々の正論に決定的に欠落していたのは，幕府の避戦意識に基づく違勅条約締結を断固糾弾し，かかる屈辱的不平等条約を一旦破棄した上で改めて対等な国家関係を樹立すべきだとする視点である。一見妥当に思われる長井の立論では，あくまで幕府の外交・内政含めた治政が追認されており，公武一和のスローガンも幕府にとって誠に好都合な御用イデオロギーに他ならなかったから，長州藩内の尊攘派（松陰の門弟達が中心をなす）によってその本質を看破され，断罪に追い込まれたのである。

お わ り に

本稿では，吉田松陰の対外観念，特に偏狭な排外主義的攘夷でもなければ無定見な開国の軟弱外交でもない，日本の毅然たる独立堅持を基本とした“開国攘夷”論の本質を検討してみた。これまで「吉田松陰の思想」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで考察した，尊王論，民本主義，対外観の三本の柱をベースとして，松陰の体制変革思想がどのような果実を実らせることになるか，次稿では松陰の「草莽崛起論」を取り上げて，4部構成の拙論の締め括りとしたい。

13) 同前，220頁。